

# オーラル (aural-oral) 中心の授業の実践： その理念と実際

A Trial of an Aural-Oral-Oriented English Course :  
The Idea and the Practice

伊勢村定雄

現在、大学の英語の授業は時代の変化に応じた対応を求められていることは衆目の認めるところであり、様々な場で様々な試みが行われている。その一つがオーラル中心の授業の展開であり、その理念に比べて実際の現場における指針は人目に触れることが少ない。また、英語音声学の授業ではなく、英語を専門外の学生達にどう教えるのかが問題であり、ここにあってこの問題を取り扱う意義があると考ええる。

以下その概略を示す。

## 0. 本論の目的

### 1. オーラル中心の授業とは

#### 1.1 オーラル中心の授業の理念

#### 1.2 オーラル中心の授業の実際

母音、子音、イントネーションの問題の検討

### 2. 授業アンケートの評価

### 3. まとめ/今後の展望

付属資料：授業アンケートの項目とその結果

キーワード：オーラル (aural-oral) 中心の授業、フィールドワークとしての授業、(テキストの)音読、発音指導、マニュアル化

## 0. はじめに

### 0-1. 誰にでもできるオーラルの授業を目指して

本論の第一の目的は筆者の少ない経験を通して考えた結果を、多くの方々が使用可能な状態で、その理念とノウハウを提示し、現在求められている、いわゆるオーラル中心の授業の展開の礎になることを目指し、不備で

あるのを承知で、あえてここに公表するものである。それは、私自身が、「オーラル中心の授業」と言われて、はたと考えこんでしまった経験を持つものであるからである。その原因は、発音の理論的解説書と現場をどう埋めれば良いのかが筆者自身分からなかったことにある。

## 0-2. 何故オーラル中心の授業か

大学における「オーラル中心の授業」はその出発点からして、少し偏向した目的を持つことを余儀なくされている。そもそも、音声抜きにした外国語の学習があろうはずもなく、それがわが国の文化的、歴史的特性から、音声を重視せずとも外国語から利益を得ることが可能であったし、現在でも一部では真実である。だが、言語学習はトータルなものであるべきだというのは、反論の余地はないはずである。であるならば、足りないものを補うことで、それを指すのも一つの方法である。

大学の英語教育は、次の二つの事情から、確実に変化を迫られていることは衆目の知るところである。急激に国際化しつつあるわが国を取り巻く事情があり、老いも若きも海外旅行が当り前の時代となり、英語での日常会話能力が求められている。また、国内的には大学教育の大衆化といううねりの中での大幅なカリキュラムの変化となって表われている。このような中では、英文科（筆者も大学院ではそこに籍をおいたが）に続いて来た教養主義の伝統も、その存立の意義さえ問われるという事態になっていることは、現実に授業という枠のなかで、学生たちが話題にし、かつよく口にするように、「6年間も英語をやったのに、日常会話の英語も話せませんし、聞いても分かりません」という一言でぐらつしてしまうのが現実である。我々はこの点を出発点にしなければならない。なぜなら、これが大方の学生が抱えているコンプレックスであり、これを克服することが、まさに静かな国民的要請になっているからである。文部省のみならず他の官庁まで巻き込んで会話英語の修得を目指すというのも滑稽な話であるが、避けて通れない問題であることは確かであろう。

### 0-3. 方法論とその目標について

そのきっかけは、「音声中心の英語の授業をやってください」と言われて、身近な方々に尋ねてみたが、私自身にわかにはその姿を具体的に捉えることができなかったこと、また、何種類かの雑誌や英語教育関係の書物を調べてみると、その必要性は十分過ぎるほどうたっているものの、筆者自身がオーラル中心の授業を展開するに当たって、利用できかつ具体的な指針となりうるものを見出しえなかったことから始まった。そこで、具体的な個別の問題として我々英語教師に求められていることは、中・高という6年間の英語学習の欠けている部分を補強してやることであり、今はそれがたまたま「オーラル中心の授業」という形を取らざるをえないだけなのである。

さらに、筆者が実践したのは、いわゆる「英語音声学」の授業ではない。「～学」などという高度な学問ではなく、武道と同じように「僕はお師匠さんとして、君たちにけいこをつけてるだけだから」と何度となく学生に言った。この考えは、初めのうちは、予想したより学生に受けられなかった。嘆かわしいことには、学生たちの中には、アンケートの要望欄に、いわゆる「講読の英語をやって欲しかった」と書いたものもごく少数（1名／198名）ではあるがいたほどである。その反応には二つの背景が存在する。一つは、教師の一方通行の講義のほうが楽だから、というのである。もう一つは、「大学の授業」イコール「高度な学問」という先入観がある。尋ねてみると、「そのほうが授業らしい」と言うのだ。たとえ十分な学力が備わっていない学生であっても、大学では授業で体を使って作業を行なうという考えにはなじめないらしい。そもそも、外国語の学習は‘learn’であって、‘study’ではないはずである。英語専攻でない学生たちにとってはそれがまさに必要とされることである。

また、対象となる学生たちが英語専攻でない学生たちであれば、どこまで、そして何を教えてよいかについてもばらつきがあり、一つの物差しでは計りづらく、お世辞にもやりやすいものではない。しかも、筆者の場合、

幸か不幸かオーラル中心のクラスを9クラスも受け持つことになった。また、そのうちの3クラスは40人以上のクラスであり、中には私語の多い者もいて、注意しなければならなかったクラスもあった。このレベルでは、オーラルの授業は成立しにくいことも問題点として残る。

また、週1回の授業では、英語についての知識を与えるのには限界があり、それよりは外国語修得技法の一環として、ノウハウを学ばせることを目標とした。それゆえ、この場では、できるだけ細かく筆者の方法論の全体像を紹介し、問題点を整理したうえで、今後の一つの参考となることを目指した。以下は、この現実はどう対処したらよいかを筆者なりに実践して、それをマニュアル化できないかと考えた結果である。

## 1. オーラル中心の授業とは

### 1-1. オーラル授業の理念

#### 1-1-1. この授業における戦略的構造

授業はいわゆる発音指導からリスニングに入っていき発声中心の方法をとる。それによって、受け身の姿勢からの脱却を図ることができるからである。これまでは、日本人は、欧米人に比べると、遠慮しがちであり、自分を積極的に表現しないことが美徳とされてきた伝統があり、ポジティブに自分を表現しないという面があることが指摘されてきた。だが、言語学習においてはそれはマイナスにこそなれプラスにはならない。したがって、発話第一の授業形態をとることとした。これは、もちろん日本人だけでなく、どこの民族にも通用する方法であるのだが。

また、表向きは英語の音声の習得を目指すトレーニングの方式を取り、その裏では常に何かに従事させる状態にしておき、飽きる暇を一切与えないように工夫した。それゆえ、複数の学生が「気がついたらもう授業が終わっていた」とコメントを残すことになった。そのためには、次に何をやるのかを単純化して学生に熟知させ、連続して次から次へと指示を出すこ

ととなった。これについては、「授業の実際」のところで具体的に説明する。

### 1-1-2. 何を教えるかを明確化していくこと

学生には、4月の当初から「この授業では、主に音声中心の授業展開を行なうことになります。ですから、Presentation（以下 Presentation というときには筆者使用のテキスト中の Presentation のことを指す。Dialogue という時も同じ。）の和訳を済ませたら、これですべてやる事が終わったなどと思って安心しないように」と何度も注意を喚起した。また、「英語の音声をマスターすれば全部終わったと思うのも間違いである。これは、英語修得のワンステップにすぎないので、いいですね」と念を押した。実は、アンケートの最後の欄に、「先生は最後まで音声中心でやっていたので、やりやすかった」との指摘をした学生がいたが、結果的には日常会話まで至らなかった部分もあるという感じは残ってしまった。発音だけをやることが、オーラル中心の授業の重大関心事ではないからだ。だが、ねらい通り教師の意図は十分伝わっていた。とりあえず、授業の目標は不明確ではなかったと言えよう<sup>2</sup>。

### 1-1-3. 音声を教えるだけでは、言語修得の一環とはならない

音声中心の授業とはいえ、言語修得の一環であり、生理学や医学の授業ではないので、音声のみを教えていればよいのではない。それゆえ、音声修得は、常に副次的な位置付けのもとに行なわれねばならない。例えば、会話表現の修得時や、日常表現をマスターさせる時に、行なうのである。筆者の場合は、主として会話表現修得の一環と位置付けて、英語音声の授業を行なった。

この授業の性格は、どちらかといえば作業をさせることが中心となるのは、英語修得の一過程としてのものであり、いわゆるブラッシュ・アップを目的としているからである。いわゆる「英語音声学」は、英文科や英米

語学科などの専門課程の学生だけが学ぶべきものである。代わりに彼等に必要なのは、コミュニケーションに支障をきたさないような発音、発声を身につけることであり、できるなら褒められるぐらい上手になればなおよいということになる。

また、限られた時間内での展開となるので、テキスト中の Presentation や Dialogue の和訳に含蓄が入りすぎてはならない。そのため、私の場合、「さー、急いで!」と追い立てながら和訳をこなした。学生の側も和訳に時間を取りすぎると、それだけで満足してしまいがちになり、「音声を直すこと」、「英語の口語表現の修得」という本来の目的を見失ってしまうからである。実際、二つのクラスでは学力が低いこともあり、そういう現象が見られた。とはいえ、文意を正確に把握できないことは、口先だけパクパク動かし続けていることとなり、ますます悲惨な結果となるので、学生たちを常に質問攻めにして、文意を理解しているかどうか、彼等が習慣として身につけるまで目を配る必要がある。要は授業前に着実に辞書を引く習慣をつけさせることである。

#### 1-1-4. 評価について

評価は、ペーパー・テストは行わずに、オーラル・テストとしてダイアログの暗唱を二人ずつのチームを組ませて3~4回実施した。さらに、レポートを課したほか、出席を重視することを学生にも、当初説明しておいた。なぜなら、発音は訓練回数に比例して良くなることは、一連の授業結果からも感触を得ているが、何度注意を受け、意識して直そうとしたかが、意味があるからである。加えて、レポートは、最終目標である日常会話をマスターする一環であるから、英語の発音だけでなくその文化的背景をも意識させることをねらったものである<sup>3</sup>。

#### 1-1-5. ブリティッシュか? アメリカンか?

筆者の場合、一応アメリカンの英語音声を用いた。現在では、様々な英

語が各地で話されており、我々日本人も日本人の英語を話しているかもしれないが、アメリカ人が世界中に進出した結果、善し悪しは別として、アメリカ英語が *Lingua Franca* としての地位を確保していることは否定できない<sup>4</sup>。また、いくつかの母音、子音を除けば、英語の一般的スタイルは共通しており、それらの違いを覚えるよりは、一つのパターンをマスターしたほうがよいからである。例えば、母音に関しては、「person の下線部の音 [ə:(r)] に [r] の音が入るかどうかがよりは、母音そのものが意味の差異を生ずる原因なのだから」と説明をした。これについては、別の項目でも触れることにする。

#### 1-1-6. テキストの Presentation を音読させる意味と目的

発音上の注意をせっかく与えても、「家でやっておきなさい」の一言でかたづけると、学生の間になきな差が生じることになってしまいがちである。これは、専門外、あるいは低学力の集団ではさらに激しい差を生みだしてしまうことになることは容易に予想がつく。これでは、次第にやりにくさだけが拡がってしまい、ますますその差は大きくなってしまふことになる。これを少しでも平均化し、学生の間には、この Presentation の音読の効果を体験させるためには、その場で出来得る限り音読させる機会を作ってやる必要がある。

また、英語の発声には、それなりのリズムとイントネーションを伴わなければ、英語らしさを感じることはできないので、単発的な短い会話表現よりは、あるまとまった量の、それも文意の理解が完了している英文が望ましいことは、その昔国広正雄氏などの指摘でも明らかである。それは、一定の長さの英文の中でしか、リズムやイントネーションなどは練習するのが難しいからである。もちろん、Dialogue の音読も、効果はあるのだが、要するに量が少ないため、英文の内容に拡がりがなく、英語の世界に入る前に終わってしまうという短所がある。この点からも、筆者が用いたテキストの Presentation (320 語強) の長さは適当な長さであると思われる

る。また、日本語の会話の中に英語の単語やフレーズを入れると、なおさら無理して発声することになり、よほど気をつけてやらないと不自然さを助長しかねない。

ただ、ひたすら音読するというのは単純作業であるため、飽きやすいという特性がある。これは前もってあるいは途中で学生に説明することによって、彼等が何を目標しているのか分からないという不安を取り除いてやる必要がある。それは、授業の具体的展開においても説明を加えたが、励ましとともに重要な点である。

#### 1-1-7. 音声学の理論とオーラル授業

音声学の理論とオーラルの授業の間の溝は意外とひろい。音声理論はサンプルから抽出された共通項目を体系化したものであり、記号化される過程で簡略化される。そのため、我々はそれを読んでも、完全に個別の人間の音声を復元することはできなくなっている。だが、音声学の理論は、我々が知識を整理する時、また学生に教える時にも、有益な指針であり、貴重な手助けとなる。

また、実際の音声は、国や地域による差から個人の間の差まで、バラエティーに富んでいるが、そのことはイントネーションにおいてはさらに大きな問題となる。何故なら、イントネーションは、短い個々の単語の発音と違って、さらに発話者の感情という要素が問題となるからである。しかしながら、それにも一応の理論は存在するので、基本的な知識は学生に与えることは可能である。また、現在では理論表記と実際を埋めるために、英語音声学の理論に録音テープを付けたものや二か国語放送や英語放送もあり、英語国民も多数いるので、この溝を埋めることもその気になりさえすれば可能な状況が増しつつある。

したがって、実際の「オーラル中心の英語の授業」では、「音声学の理論」を教えるのではなく、理論的説明を助けとしながら、英語音声をできるだけ学生たちの実情に合わせた形で把握させ、身につけさせる手助けで



あればよい。また現場では、日本語という母国語の干渉だけでなく、後であげるような間違っただけの癖などのさまざまな難関を排除しながら進む際には、理論はやはり指針となりうると言える。

#### 1-1-8. 教養課程の英語でのオーラル中心の授業はフィールド・ワークの場

授業は、言わばフィールド・ワークにして、例文が出るまで、説明したり、質問したりしなかった。何故なら、基本的な意味や発音の確認のため時間がかかることや、人によってまた学年や専攻によって欠落している部分が異なるからである。また、フィールド・ワークと言っても、母音、子音、イントネーションのある程度のチェックポイントは教師自らはリストアップして、頭に入っている状態にしておく必要がある。それによって、教えるべき概要を押さえておくことができるし、余裕にもなる。また、英語専攻でない専門外の学生たちにとっては、英語の授業はいわゆる「英語についての学問」ではなく、「英語そのもの」の授業であるので、音声についての突っ込んだ知識よりも即実践的なものが必要とされている。ここにもフィールド・ワークであるということの意味がある。

#### 1-2. オーラル授業の実際

##### 1-2-1. テキスト

テキストは、それぞれのクラスで、成美堂の *Amusing Tales, Twenty Tales* の2冊のうちの一つを用いた。この2冊のテキストを使用した理由は、2冊ともスタイルが同じであり、また文意がいたずらに難解ではなく、口語英語表現が多く含まれ、バランスがとれたものだからである。内容は、Presentation (320語強)、Listening Comprehension I (Presentation の内容についての質問5問)、Listening Comprehension II (穴埋め問題6問)、Dialogue (10-15行)、Useful Expressions (2例)、Put into English (4題) とバランスよく配置してあるのが特徴である。(詳しくは

参考文献を参照のこと。)当初は、このテキストの中でも、Presentationと Dialogue 中心に進めるだけでなく、欲張って Useful Expressions、そして Put into English のところも全部やろうとしたが、時間的な制約もあり、Presentation と Dialogue に多くの時間を割くことになった。

### 1-2-2. テープ・レコーダー使用の位置付け

テープ・レコーダーを用いて、発音の指導を行なうには、時折間伸びしてしまうことがある。ある調査によると、57.5%の学生が「ただ聞かせるだけ」は問題だとしているほどである<sup>5</sup>。その原因は学生がリスニングの意味を理解せず、ただ漫然と聞いているからである。これでは、この時間帯は休息の時間となってしまうかねない。そうさせないためには彼等に聞くことの意味を明確にさせなければならない。そこで、動機付けの作業として、音読とのタイ・アップを実施した。教師が Presentation のモデル・リーディングを行ないながら、音声上の問題点を指摘し、質問を繰り返しながら発音練習させ、さらに Presentation を通常は時間的余裕に応じて3～5回音読させ、十分マスターしてない部分を意識させる時間にあてた。その次に、ネイティブ・スピーカーによるテープを聞かせるのである。できるならば、彼等の頭の中に、英語の文章の流れが入っていればなおリスニングの効果は上がるので、時間の許す限り音読の回数を多くするとよい。この時間に、テープのセットを済ませることもでき、学生には退屈する暇を与えずにすむという利点も生まれる。

### 1-2-3. 「音声を伝える」とは「個人と個人のコミュニケーション」である

個人と個人とのコミュニケーションの対話には当然、名称を伴った人格が登場してくることになる。それゆえ、名前は知らないが単なる「学生」という名称を持つ人間などは存在しない。具体的にA君であり、B君でなければならない。筆者自身も40名を越すクラスでは、当初どうしたものかと途方に暮れた。答えさせる際にも、順番にしか指名することが出来ず、ど

うしても緊張感を欠くことがあった。そこで、しばらくして学生自身に座席を決めさせ、その場を定位置とするようにしたが、一カ月たっても違うところに着席するものが出て、こちらの方が狼狽してしまった。ともあれ、決めたことでやりやすくなり、一人ひとり名前を指名しての対話形式も定着した。実は、「対話があった」と教えてくれたのは、1女子学生であったが、当方としては、そのようなことはまったく意識してはいなかったにもかかわらず、オーラル指導は、結果的に、学生と教師あるいは生徒と生徒の間での対話を伴うことになるのは必然的な成り行きであった。

#### 1-2-4. オーラル授業、その試みの中心

実際の授業の展開について、次に述べていく。おおよそ、テキストの1課を90分2こまの授業で終わった。まず、Presentation において、各語(句)の発音、イントネーションを一通り示すため、教師が音読し、その後、学生たち4~6名を次々に指名し、音読させながら音を確認させた。その直後に、その意味をすばやく答えさせる。これは1段落1人の割り当てとし、英語を教師が音読し、学生に和訳を言わせる。さらに、はっきり理解してないと思われるような答え方をした場合には、基本の語義にまでさかのぼって、質問する。時にはその場で辞書を引かせることが多々あった。その後、今度は学生たちに音読するように指示し、その間はテープのセットをしたり、巡回しながら、学生たちの発音上のミスを直していく。このときは、「近所の者にはうるさくてもいいから、できるだけ大きな声を出すように」と何度となく言ったが、迷惑になるほど大きい声を出した者はどこにも出現しなかった。

大きい声を出せと指示するには理由がある。教師が学生の発音を直したり、怠ける学生をチェックしたりするのも大事だが、何よりも、通常の状態では日本語の発声には必要ではない大量の息を使う英語の発声の練習にもなるからである。このように、何度も彼等の発音をチェックしながら先へすすめる。

また、Presentation の音読は「4、5回読むと飽きるからね、そこからが大事だから」と心理的な面も考慮しながら、教師は水先案内人の役割を果たすことが肝要である。経験のない学生たちにとっては、不安な要素をできるだけ除いてやる必要があるからである。前期、それも5月頃は、どのような効果があるのか不安な顔をしていた学生たちも、後期にはだんだんこの音読の効果を意識してか、すすんで声を出すようになった。

ともあれ、この部分を2時限の時間単位で図式化すると次のようになる。なお、複数の学校にまたがり、学生たちの学力にばらつきがあるため、時間配分は一律にとることができなかったこともあり省略した。

<1時限目>

教師：(Presentation 音読) ⇨ 学生：(段落ごとのPresentation 音読)  
(教師：発音チェック)

⇨ 教師：(Presentation 音読) ⇨ 学生：(Presentation 音読5～10回)  
学生：(後、一文ごとに和訳) (教師は「音読は頭の中に英語が通り易い道を作る作業である」と助言)

⇨ 学生：(リスニング) ⇨ 学生：(Listening Comprehension I)  
Presentation [復習として] [テスト] および [解答]  
教師：(質問文を書き取るように英語で指示)  
教師：(聞き取れない理由も説明する)

⇨ 1時限目終了

<2時限目>

教師：(Presentation 音読) ⇨ 学生：(Presentation 音読3回)

- ⇒ 学生：(Listening Comprehension II) [テスト]および[解答]
- ⇒ 教師/学生：(Dialogue) [音読] ⇒ 学生：(Dialogue の和訳)  
(発音確認)
- ⇒ 教師：(Useful Expressions ⇒ Put into English  
説明) および (〈a〉学生4名に黒板で解答を指示  
学生：(発音練習) 〈b〉残りの学生には Dialogue の音読10回  
を指示 その後暗記するように指示  
〈a〉〈b〉の2つを同時進行させる)
- ⇒ 教師：(Put into English ⇒ 教師/学生：(Dialogue 練習)  
を解答) 教師：(発音訂正  
イントネーション含)
- ⇒ 学生：(5回以上音読： ⇒ 学生：(教室の前でDialogueを演じる)  
できれば口になじむまで) 教師：(後で講評する)  
教師：(巡回しながら発音注意)
- ⇒ 2時限目終了

補足①……Dialogueは前回の時に覚えてくるように指示しておく効果的。  
また、2時限目でそこまで行かない場合は、Dialogueだけ残  
して次回その復習および暗唱から始めればよい。

補足②……巡回のときは注意だけでなく具体的に「それでいい」や「もう  
ちょっと」などの励ましの言葉を与えたりもした。

以上が、おおよその授業の進行の仕方であるが、教師がリーダー・シップ  
を取り、学生たちの発音の注意だけに限らず、英語という媒体を通して様  
々な助言を行なっていることがわかる。

### 1-2-5. Dialogue の位置付け

上で示した授業進行を見ていただいたように、Presentation とともに Dialogue に重点が置かれていることがわかる。ダイアログの目的は次の4点である。(1)発音をスムーズなものにする。(2)英語表現を覚える。(3)実際の英語を使う場と類似の状況に身を置く。(4)英語を話すときのマナー(音調、姿勢、視線)を考える。これらの中でも(1)~(3)は言語活動の根幹部分であり、(4)はその周辺部分のことであるが、少しばかり踏み込んで考えさせた。

(1)~(3)について言うと、Dialogue を暗唱させておかないと、教科書を見ながらでは効果は期待できない。スムーズさに欠け、その場しのぎになってしまうからだ。また、Dialogue の暗唱を何も見ずに行なうことは、疑似会話の中に身を置くことを意味し、特に人前でのごとくであるので、あがったり、忘れてたりして、実力の半分ほどしか出せないものが出てくるが、それはそれでよい。そのあと、より完全にマスターしてくるものの必要性を感じたと話してくれた学生が数名いた。換言すれば、オートマチックな状態にまでしておかないと、自分のものとして、道具である英語をコマンドできないことが実感できたものがいたということである。Dialogue は無意識な状態で発音できることが望ましく、このためにも便宜的に50回以上音読してくるようにと指示した。

(4)に関しては、異文化コミュニケーションを目指すのであれば、誤解を避けることが大事である。だから、「姿勢はまっすぐにして!」、「相手の顔を見て!」などと何度となく注意した。前期はまだ学生たちと私の距離があったので、少し控えたが、後期にはそれらについて説明を加えつつ、注意の回数を多くした。これは本来、正式な人類学的な観点からのコミュニケーション論を同時に教えるのが望ましいが、今は多くの外国人が滞在しているので、要点の説明だけでもいいのかもしれない。

### 1-2-6. 発音指導のポイント (私案/試案)

1-2-6-0. 「アンド、イットはやめよう」、「それは英語ではない」から始  
まった

たとえ、自分が不十分な知識や技能しかなくとも、自分が学んだことをはっきりと示すのが教師の役割である。私は、カタカナ式の「アンド」、「イット」は英語ではなく日本語(?)であるとやっている。であるから、「それは英語ではない」ということになるのだが、言われた学生の中には、やはり少々面喰らったものも多かった。その次に、その理由を理論的に説明した。「英語の and と it はともに1音節の音である。2音節で発音したらだめでしょう。だから、間伸びしてしまって、リズムがくずれるんだよ」と。その他についても、このスタンスを最後まで貫いたが、その説明で大方の学生は納得してくれた。だが、カタカナ「アンド」、「イット」式の発音は2カ月間はなくならなかった。発音そのものは技術的にはそれほど困難なものではないが、教室では何となく気恥ずかしくてしっかり言えないらしい。まともに授業を受けている学生で、本格的になくなったのは、後期になってからである。このことから、意識の問題がいかに大きいかわかる。

1-2-6-1. 母音の問題点

上であげた and や it に似通ったことは、特に前期にはかなり頻繁に発生した。だが、それ以上に技術的な問題も多かった。それを先ず母音から拾ってみよう。その際に、私がどのような言葉を使って説明したかも、できる限り思い出しながらそのまま記述することにする。

だれもが英語の学習の初期の段階でつまづいてしまう音に、past, fast, cat, などに含まれるアメリカ音 [æ] の音がある。cat 以外では、イギリス音 [ɑ:] はわりと日本人にも簡単で [アー] と伸ばせばよい単語であるが、[æ] の音しかない語ではそうはいかない。これは、「もちろん音声上の区別も重要であるが、むしろあまり無理して発音せずに音の長さの問題が通じるか通じないかの別れ目である」と説明した。この音には、筆者自

身もごく最近まで自信がなかったという記憶があるほどであるが、無理して口を横に開いて「[エ]の口の形で[ア]の音を出す」と教わったが、なかなかそのコツを体得できなかった。そこで、教えるときには、これでは駄目だと思い悩んだ末、音の長さに注目して考えた。つまり、「この [æ] の音は cut, but の音 [ʌ] より 2~2.5 倍の長さで発音していけば他の [ア] と聞こえる音から区別可能となる」と学生には説明した。そして、個々の単語で練習させ、少しずつ慣れるようにした。この説明は、これまで悩んだ経験のある学生たちには分かりやすいとのことだった。ついでに言うと、「cut, but の [ʌ] の音は口はあまり開かずいきなり [アッ] と言うときの音だ」と説明した。この [ʌ] については、特に注意したのは、us に強勢がかかる音の時に [ɑ:s] と間伸びして発音するものが何人かいたが、これはブリティッシュ音では arse ととられる可能性があるが、これはもちろん the buttocks あるいは the anus の意味である。これは極端な例であるが、我々はネイティブ・スピーカーではないとはいえ、注意を要する点である。

また、「or は [オア] じゃないし、for も [フォア] じゃない。ましてや [ホア] なんかではない。むしろ [オー] [フォー] と口を縦に開けて伸ばすようにして、[r] はつけてもつけなくても意味の違いを生む要素にはならない」と説明した。また、二重母音と長母音の区別となると一人残らず問題があった。例えば、「Oh [ou] は二重母音だけど、そう発音してる？」と尋ねると、ほとんどの学生が驚いたような顔をした。どちらかと言うとカタカナ式に [オ] にアクセントをおいて [オッ] と言ったほうが近いと説明した。

#### 1-2-6-2. 二重母音の問題

これは、英語の明瞭さを向上させるためには、大事なポイントである。上にあげた [ou]、[au] などを含め、大いに注意する必要がある。学生たちは言われたことは一応の対応を示すものが大半であった。そのポイン



トは、大方の学生たちが日本語式にアクセントのない2つの母音を並列的に発音する癖があることであるが、これにたいして、たとえばカタカナで便宜的に示すと、[アッ]の[A]にアクセントを付けて発音するように注意させた。これは [ou] などと同じであるが、英語音声の明瞭さを確保するためには重要であることを何度となく、必要に応じてそのつど、説明を与えた。

いまひとつの問題は、二重母音と長音の区別である。通常日本語では、[オー]と[オッ]の区別は明確に区別しなくても誤解されずに意思疎通をはかることができる。いや、むしろ通常は、例えば「王様」という語は[オーサマ]と発音されることが普通であり、二重母音を強調して[オッサマ]発音されることの方がまれである。英語では、逆に考えていけば、どこを押さえるべきかを推し量ることができよう。

一通り二重母音の発音の全体像を学生たちに示し、浸透させるのに前期いっぱいかなかったが、そのあと後期においては、はなはだしいもの以外は、特に注意しなかった。比重がダイアログの暗唱に移っていたこともあり、上級者を目指しているもの以外は必要ではないと判断したからである。

### 1-2-6-3. 子音の問題点

注意、練習ともに回数が多かったのは、もちろん、[th]と[s]の音の区別であろう<sup>6</sup>。特に [th] は日本語に存在しない音であることと、中、高と教室でまじめにやると冷やかされたりすることもあるらしいので、ますますやっかいである。私の場合は、[s]の音は「きれるような無声音の「スー（便宜的に [s] の同音と仮定して）」という音だし、「[th]の音はその切れるような音がないつまった音で、そのような「スー」という音はでないからね」と二つを対比させながら、学生たちにも音を出させて区別をつけさせた。もちろん、これが無声音であることを、自分の喉に指を当てさせてから、確認させた。この voiceless [s] と voiceless [th] の違いは比較的早く学生たちは理解してくれた。

また、よく指摘されるように、[ɹ] と [ɹ̥] の音は、学生側も十分意識しているのもそれほど注意の必要はなかった。もちろん、彼等の音が完全であったというのではないが、彼等なりに努力しているようであったので、これらについてはあまり触れずにすんだ。むしろ問題は [n] [ʃ] などのような、あまり意識されていない音の方が大変であった。特に、can という時の [n] の音は「上の歯と歯茎の間のところまで舌を押さえて止めていますか」と尋ねねばならないことが多々あった。「ちゃんと止めないと、[~ng] の音になってしまいますよ」と注意した。確かに、日本語は、普通舌が歯と歯茎についていない状態で [ン] と発音しても、舌をそこにつけなくても意味と表記はかわらないが、英語はそうではない。この二つの違いは、大きな問題ではないかもしれないが、done と dung の区別ぐらいはつけなければならぬ。

同じことは [s]、[ʃ] にも言える。特に頻繁に使われる代名詞 she と sea の区別がつかないものが多数いた。また、[ʃ] の音が出せないのも、「口先を少し開いて突き出しながら発音する」と説明して練習させた。その際、忘れられないように、「I'm sitting on the sofa.」と言うべきところを 'I'm shitting on the sofa.」と言ってしまっても理解されるかもしれないが、意味を考えると赤面するよ」とつけ加えた。'shit' の意味が分からない学生にはその場で引かせた。他にも、学生が誤解しているものに [h] の音があるが、これについては筆者もうるさく言わなかった。これは、何とかごまかすことができる可能性があるからである。

しかし、どうしてもごまかせない音に [w] の音がある。これは、かつて私自身もネイティブ・スピーカーに注意されたこともあり、学生にも [w] が出てきたら「意識して口を突き出してとがらせるように」と何度となく注意を喚起したが、実はなかなか難しかったようである。ひょっとすると [th] などよりよほど難しいものであるらしい。これと同じぐらい、大変だったのは [f] であった。説明は簡単で「下唇を軽く噛むように押さえるだけ」と言うのであるが、できる者はすぐに覚えるが、できない者

はあせったりしてなかなか改善が見られなかった。この点は今後の課題である。

子音ではもう一つ言っておかねばならない。それは複数の子音と母音の結合した単語の発音で、子音間に母音をはさんで発音する癖である。たとえば、strange のなかの [str] という音を [ストレ] と3音節に発音してしまって、リズムがくずれる原因を作っているのだ。そこで、「[str] は3文字だけど、子音1個と同じだからね。travel の [tr] もそうだからね。間違っても [トラ] とカタカナで英語を発音しないように」と注意を喚起し、文字の数だけ音を出す日本語式のカタカナ英語の感覚からの脱却をめざした。strange においては、一音節の単語であるので [str] の次の [ei] の上に自動的にアクセントはかかっており、また travel の場合は次の [æ] の上にアクセント記号がついている辞書が多いが、語頭の文字からいきなり発音するように促すほうが理解されやすい。英英辞典には実際そう表記してあるものも少なくない。他には、全体としては [t][d] などの子音に余計な母音をつけて発音する例が多く目立った。

当り前のことであるが、上述のような、個々の母音、子音は、音素だけトレーニングしても意味がないので、必ず英文の一部として練習させることが肝要である。

#### 1-2-6-4. イントネーション

学生たちが授業のペースに慣れてくると、今度はリズムとイントネーションに重心が移る。この段階では、基本的な「上昇調子 (rising-intonation)」、「下降調子 (falling-intonation)」の他に、いわゆる WH-question の場合の下降調子、また Yes-No question の上昇調子の他、Tag-question についても、例文が出る度に知識を確認したうえで、次の段階に入る<sup>7)</sup>。

それゆえ、次の段階として、何度も注意した代表的なものを具体的に例文あるいは句を挙げて、それについての説明を試みることにする。おおよその音声の強弱と長さは視覚的効果をねらって、文字の大きさを5段階に

して試みとして表記した。

(誤)

(正)

- |  |                                 |
|--|---------------------------------|
| (1) ...take IT.  | ⇒ ...TAKE it.                   |
| Peter was telling ME.                                    | ⇒ PETER was TELLing me.         |
| He WOULD like TO do IT.                                  | ⇒ He would LIKE to DO it.       |
| John is going TO do IT.                                  | ⇒ JOHN is GOing to DO it.       |
| (2) I'm sorry TO hear that.                              | ⇒ I'M SORRY to HEAR THAT.       |
| I'm glad TO see you.                                     | ⇒ I'M GLAD to SEE you.          |
| (3) He WOULD sit there,...                               | ⇒ HE would SIT there,...        |
| ...,and only the wheel that HAD HAD the chain round IT ! |                                 |
| ⇒ and only the WHEEL that had HAD the CHAIN ROUND it.    |                                 |
| Joe SHOULD take IT.                                      | ⇒ JOE should TAKE it.           |
| He SHOULD HAVE BEEN...                                   | ⇒ HE should have BEEN...        |
| John SHOULD HAVE done IT.                                |                                 |
|  | ⇒ JOHN should have DONE it.     |
| She HAD HAD IT.  | ⇒ SHE had HAD it.               |
| (4) ...TURN out/turn out                                 | ⇒ ...turn OUT                   |
| ...TURN off/turn off                                     | ⇒ ...turn OFF                   |
| (5) ...,THOUGH it is pretty hard.                        | ⇒ ...,though it is pretty HARD. |
| ...,WHEN she had done it.                                | ⇒ ...,when she had DONE it.     |
| ...,AS it is difficult.                                  | ⇒ ...,as it is DIFFICULT.       |

先ず、(1)型は、「動詞＋目的語型」であるが、多くの学生がこのミスをおかしていた。そのために、無理な発音が身についたものもあり、なかなか直すことができず、自信を持っていないようであった。これは、図に示しているごとく、「動詞と次の目的語を一つの単語として発音し、初めの動詞に

アクセントをかけて発音せよ」と指示すると、何回かの練習のあとでできるようになったものが多かった。

(2)型は、[形容詞+前置詞+動詞]型であるが、コミュニケーションに重要な語句が意識されてないために起こる不的確な発音の間違いであり、文意に気を配ることに加えて重要な意味を伝えるのはどの単語かを質問して答えさせたりえて、「前置詞はこの場合なくてもわかるので、弱くそしてすばやく流すこと」と説明した。ついでに挙げると、たとえば、…for FOUR daysなども、前置詞をさっと弱く読み飛ばして、数詞を強調しなければならぬ例である。

(3)型は、[主語+助動詞+動詞型]であり、スペリングだけしか目に入らないものにとっては、どの単語もまったく区別なく発音される結果となる例である。これは、「助動詞は弱くすばやく、動詞は強くしっかりと発音するように」と助言した。これは、理論的にはすぐ理解できたようであるが、思ったより習慣化することは大変であるようだ。それは、漢文の素読を繰り返すのと同じように読むということが習慣化しているからであろうか、それとも[子音+母音]という同じ単位の音節の連続に慣れすぎているからなのか、弱くて速い音があることにはなかなか学生たちは慣れなかった。もちろん、一部はすぐ身につけたけれども。また、動詞の次に来る目的語が1音節で母音で始まる代名詞itなどと、同じ代名詞でもthatの場合では後者の方が前者より強調されて発音されることなどは(2)の上の例文との比較でもわかる。

(4)型は、[動詞+副詞型]であり、「後置の語が意味の形成に大きく作用するので、後置の副詞を強調してはっきりと発音するように」と促した。これは、気持ちの上では、そうしようという者はいるものの、実際はすぐにできてはいなかった。

(5)型はリスニングの時に目立った学生たちの多くが聞き取れなかったところである。その原因は彼等の大部分が、別の音で聞く用意をしているのか、あるいはまったく知らないためであることがわかった。換言すれば、

彼等は全く聞いたことのない予想だにしかなかった音を聞いてしまったのである。当然自分の頭の中にパターンがないのでパターン認識ができないのだ。その特徴は、これらの接続詞は「従属節接続詞型」の文中では、すばやく弱く発音され、しかも時間もきわめて短いため、学生たちには捉えづらい音声であることである。解決策としては、この型は *though*, *when*, *as* とともに「さっと、素速く読み飛ばすように」と言って、練習させ、「自らの頭の中に従属節を導く時のパターンを作るように」と説明した後、何度も練習させてからまた聞かせ、自信を取り戻させることである。

以上、頻繁に注意を喚起したものの代表を挙げて、解説をほどこしたが、これで完全にカバー出来るというのではない。他にも、*a lot of* なども含めて、各単語をそれぞれ分節化して発音し、一つの有機体として発音している学生は当初少なかった。これも、*a-LOT-of* というように、「一単位の連語として、*Lot* に強勢をかけて発音するように」と言う必要が何度となくあったことを記憶している。他にも書きたいことはあるが、きりがないのでこのあたりで止めておく。

また、音読とリスニングの関係は全く別々のものではなく、表裏一体であるので、「自分で発音できないものは聞こえづらい」ため、ある程度定着するまでは、しっかり意識して発音練習に打込むようにと注意を喚起した。

英語は、大母音変化を経て後は特に、発音とスペリングがかけ離れすぎることになっている。このことは、英語史の研究が教えるところである。それならば、学生たちには、明確に「スペリングと発音は別のものである」と説明したうえで、辞書から出来る限り発音記号を読ませて、音節を数えさせながら学ばせるほうがよい。私のクラスでは、一部でそれを実行したが、学生たちは専門外ということもあり、徹底させるところまで至らなかった。

少し細かく説明しすぎたかもしれないが、あくまでも、学生たちが英語の発音をより理解しやすいものとするために行なった結果がこうなったの

である。

#### 1-2-6-5. オーラル中心の英語の授業の到達点とは

オーラル中心の授業は、最終的には教師も学生たちも教室では英語のみでやり取りをする形に持っていく必要がある。いきなりその段階に到達するものではないので、少しずつレベルアップをはかりながら、上級のレベルをめざすこととなる。では、このオーラル中心の授業の位置付けとしてはどのレベルかという、入門、初級、中級、上級で分類すると、初級程度のレベルであり、それも発音と発声を整ったという前提である。もちろん、人によっては発音、発声さえ調整すればすぐ中級レベルに到達する者も存在するが、期待しすぎると逆に学生との意志疎通に支障をきたす恐れが出てくるので注意を要する。現実問題として、学生たちが英語をマスターする覚悟がないことがあるからである。しかしながら、総じて言えば、オーラル中心の授業は、初級程度のレベルで良いし、将来英語を特別に使用する目的がある者たちは中級レベルの英語運用能力のトレーニングの一環としての位置付けでよい。

#### 1-2-6-6. オーラル中心の授業の特性から生ずる問題点

オーラル中心の授業で、一つだけ確認しておかねばならないのは、身体を用いて行なう作業であるのでどうしても個人差が出てしまうことである。それゆえ、一律にコーラスで練習させるのではなく、PresentationやDialogueの音読の時間に、教師が回りながら、そのような学生たちをピックアップして個人的に練習させることも必要となってくる。もし余裕があれば、自分の弱点をノートさせておき、それに集中させるのも一考である。このような作業を怠ると、一層学生たちには不満と無力感が大きくなる可能性があるので注意を要する。

また、同じ理由から、一律に1年間やるのではなく、現実には半年で十分な者もいるので、半年から1年半という長さの設定をして、受講させる

ほうが効率的である。そのほうが、どんどん学生の数を減らしていけるので、できない学生に対して集中できることになるのであるが、早く終わることが可能な学生は実際に存在する。その分だけ英会話中心等ほかの授業へと時間を振り向けることも可能となる。その場合は、評価は厳正に、できれば客観的に行なう必要が求められる。カリキュラムに余裕のあるところでは、ぜひ取り入れてほしい一点である。悪平等は時として個の問題を埋没させるだけで終わる。この点は今後の課題である。

また、筆者自身の性格もあるが、繰り返し何度も発音練習をやったので、学生の反応は「何度もよくやってくれた」というのが多かったが、中には「しつこい」と感じたものもいた（3名/198名）。特に教養課程の英語という位置付けの中ではどこまで踏み込んで良いものかは常に問題となる可能性がある。だが、基本はやはり繰り返し以外は考えられないことも事実である。

それとともに、学生などの反応からすると2年次より1年次のほうが音声の授業はすんなり入れて効果は期待できる。2年生は前年に発音中心の授業がなかった場合、それが授業の1つの基準となるので、やり方になれるのに時間がかかり無駄が多くなる。また、2年生になると専門課程に入るところもあり、興味がそちらへ向くことになるので、できるならば1年次に音声の指導は終えて、次は語い力の増大を目指すなどの方が望ましい。

## 2. アンケートの結果と今後の展望

### 2-0. アンケートを考えるにあたって

アンケートの集計は資料として添付してあるが、それを通して私の実施した方法と反応を考えてみたい。また、言い訳になるが、当初このようなエッセーを書く目的で作成したアンケートではないので、かなり雑であったり、私的な表現の項目もある。ご容赦願いたい。また、4つの大学9クラスに渡って同じ項目を答えさせるというのは、たとえ専門外とは言え、



ばらつきも大きい個所も出て、読みにくい結果を生んでしまったと言える。とはいえ、ある程度の実態をつかむ手がかりにはなるはずである。それゆえ、解説はできるだけ事実経過のみとする。

調査学生数は、回答のあったものが198名であったが、実際の授業登録者はもう少し多かった。理由欄は、必ず記入することとした。ないものは「なし」と記入するように伝えた。

## 2-1. 結果について

アンケートはおおよそ3種類に大別できる。第一に1項目から6項目までの授業の内容についての評価、第二に7項目の学生自身の準備の状態、第三に8項目(1)~(6)は技術的な問題についての問いである。授業の態度は実にバラエティーに富んでいておもしろかったが、結果を見るとわりと一致していることは予想外であった。ただ、それも数字の上の話だけで、同じ予習をしてないと答えたその内容には、学校差があるというの、いたしかたないという現実もあった。

### 2-1-1. 授業の内容について

1項目の「音声中心の授業」への反応はA、B合わせて175名88.3%が肯定的な反応を示している。その理由をいくつか拾ってみると、「高校で経験がなかったから」、また「必要だから」というのが目立った。ところが、上述のような授業の展開に対しては、2項目「授業のパターンは？」を見てわかるとおり、授業の進め方に対しては、BとCが大半を占めるに至っている。その理由として複数名のものが挙げた理由は、「特に変わったことではない」であった。また、3項目「楽しいか？」では、A、B合わせて115名58.0%と肯定的な回答があり、Cは67名33.8%であった。4項目、「今後の英語の学習にプラスになったか？」ではA、B合わせると150名75.7%が肯定的な回答をしている。また、5項目「本文の音読」(A/47名、B/91名、計138名69.6%)、6項目「ダイアローグの音読練習」

(A/55名、B/64名、計119名60.1%)の二つは、学生自身の積極的関わりを求められる部分であるので、少し肯定的回答が減少していることがわかる。つまり、授業のパターンそのものが問題と言うのではなく、5項目、6項目での活動では、予習・復習という自発的努力を求められているため、全ての学生たちに肯定される内容ではなかったと見てよい。それはこの2項目にたいして彼等がそこそこの評価しか与えていないという結果からもわかるし、「今後の学習のプラスになるか?」、また「音声中心の授業がよいか?」という2項目には肯定的な回答をしていることからわかる。ところが、自らの、「学習の準備は?」という問には、A、B合わせても40名20.2%にしか達しなかった。学生たちは教師にも厳しいが自分にも厳しいらしい。それは、8(7)項目、「もう英語の音をマスターしたか?」の自己評価にも表われている。筆者自身の予想ではほぼ100名50%以上がA、Bと回答してくるかと思っていたが、実際は14名7%にすぎなかった。これは、授業に対しては「よかった」と評価しても、自分はまだマスターというレベルではないという自己評価と見てよい。

## 2-1-2. 学生側の反応

意見には理由を書かせたのでかなりの者が書いてくれた。それは、筆者にたいしては、肯定的と受け取ることのできるものが大半であったが、そうでないものも少数あった。その両方の典型的な意見をいくつか取り上げるが、できるだけ感情的なものは避け、授業内容に直接関わるものだけとした。(自分のことなので手前みそになるところもあるがお許し下さい。)なお、原文のまま引用する。

### ①肯定的なもの：

- ・「ねむかったが、教室では目が覚め、緊張感を持って臨めた。」
- ・「高校の授業とは違い、話すことが中心だったので楽しかった。発音が上手になったので、結構厳しいことを言われたけどよかった。」

- ・「しつこいと感じたが慣れるとよかった。」
- ・「今までこれほど音にこだわったことはなかったので、いがいな発見があったりして新鮮だった。より実践的だったと思うから。」
- ・「先生の繰り返しの練習には頭が下がります。」

②否定的なもの：

- ・「日常的会話ももう少し取り入れて。」
- ・「良いことだと思っけど私には難しい。」
- ・「シロウトあいてですので、バリバリ英会話で授業を進めると理解しにくいです。」
- ・「暗唱テストは苦痛でした。文法をもう少しやってほしかった。」
- ・「本文をゆっくり解読していきたくかったです。暗唱はとにかく大変でした。」

以上のアンケートの授業への評価の理由欄の回答例からも、肯定的という答えにも、トレーニングの厳しさにたいして、当初は準備ができていなかったが、慣れると肯定的な反応に変わったことを知ることができるし、また否定的な理由にも直接オーラル中心のアプローチを真っ向から否定しようというものはごく少なかった。

2-1-3. 子音、母音について

では、その技術的な点を8(1)～8(6)項目の結果から考えてみることにする。中でも8(2)、(3)の子音と母音の問題は分かりやすいので、これらを具体的に考えてみたい。子音では、[r]/106名/53.3%、[th]/98名/45.4%、[v]/84名/42.4%、[l]/69名/34.3%、[w]/61名/30.8%、[sh]/54名/27.2%がめぼしい数字であるが、上位4位まではうなづける結果であるとともに、あれほど注意したのにまだ課題は大きいことを物語っている。だが、一方で[w]とともに[sh]が上位に来たのは、ある意味で健全な数値の

表われていると見ることもできる。なぜなら、この二つは授業中何度も注意を喚起したところにいるからだ。しかしながら、学生たちの [r] [th] [v] [l] の音声障害となるほどひどかったかというところではない。これは、何を意味しているのか不明である。

また、person [ə:(r)] 112名/56.5%、ask [æ/u:] 97名/48.9%、ahead [ə] 76名/38.3%、tour [uə] 63名/31.8%の上位4位がきわだっているが、他はすべて20%以下と、子音に比べてその数が絞られてくる。これからわかるように、これらの4つの母音だけに集中してトレーニングすることも一つの方法であるかもしれない。

筆者自身の感触では、学生たちは子音よりも母音、例えば cut [ʌ]、all [ɔ:]、tool [u:]、note [ou] など英語音声の明瞭さを大きく作用するものがまともに発音されているのを耳にした記憶はあまりないのだが、学生自身による評価と大きく異なる点である。であるならば、教師はこの学生の自己評価と別の物差しをもって発音指導に臨むべきなのだろうか。これも課題として残る。

#### 2-2-4. アンケートの評価

アンケートの結果には簡単なコメントのみを付しておいた。あとは読者の判断にまかせたい。だが、アンケートを見ても、大筋の理念は私も学生も理解しているつもりであるのに、双方ともどこまで達成できたのかは、筆者自身確信が持てない部分もある。

にもかかわらず、筆者自身もどの程度それに答えられたか、不明であるが、これからの方向性だけは、誰もが認めざるを得ないというのが現実であろう。そこで、もともとわれわれ大学の英語教師に今何が求められているのかを確認するため、その主なものを再度とりあげて、以下に挙げる。それらの疑問は、現在の大学英語教育に対する率直な疑問であり、また厳しい叱責であり、何よりも貴重な指針だからである。

…テキスト購読や教師の説明による一方通行的な授業に終始し

がちである。このような授業では、英語の実際的な運用能力をつけることはもはや期待できない。(石田 67)

大学生の授業への満足度は低い。どの授業に対しても、「不満」は「満足」の2倍強である。学習内容に限らず、授業方法においても大学生は無意識のうちに、中学校や高校では経験できなかったものを大学の授業に求めているものである。授業を見直す視点としては、次のようなものがあげられる。①実際の英語使用の多様性を体験できる場を与える。…②英語を使う喜びを味わわせる機会を与える。…③それまで蓄積してきた学生の言語知識を運用できる。…④教師と学生、および学生間の知的・精神的交流ができる言語活動を行わせる。…⑤言語材料の提示の仕方を工夫する。… (石田 73)

### 3. まとめ

オーラル中心とは言え、勘に頼ることは禁物である。実際の授業においては、必ず理由をつけての説明を基本としなければならない。学生たちは、納得のいかないことを実行することに抵抗を感じる年代であるが、十分理を尽くして体系的に説明してやれば、受け入れる能力は持っていると感じが良い。教師が模範を示して「～だから、～しなさい」と言っても、理解しないことは実施しない年齢である。その意味でも、理論は有効であるが、専門用語ではなく、それを分かり易くかみくだいて、説明していかねばならない。

音声だけ教えていれば楽なのだが、中・高でも、「最近、『教えるべき最低限の文法事項』をも無視した授業が目立ってきている。…この傾向は『オーラル・コミュニケーション』を新機軸として指導要領が改訂されたのと前後して顕著になってきた現象」(石田1995 21-22)という指摘もな

されている。相手が大学生とはいえ、皆が英語に習熟しているのではないのが実情である。それゆえ、当然であるが、生きた言葉であれば意味をとまなうものであるという基本から外れることがないよう気をつけねばならない。音声だけを強調しすぎると、話し能力が増えず、本当に挨拶程度のことしか用が足せなくなってしまう恐れがあるからである。これでは、高等教育機関である大学の授業としては問題である。現実には、ほんの日常会話程度しか学生もそして社会も求めているかもしれないが、大学教育は本来高度なレベルのトレーニングの場である。ならば、高度なリーディングの授業と日常会話を結ぶ線を模索するのも今後の課題である。一つの考えとしては、教養英語のクラスであっても、英語特別コースを設定するのも一考である。

今や時代の曲がり角で英語の必要性が本当に身近なものになって来つつある。数年前の湾岸戦争の時、ヨルダン在住のパレスチナ人の小学生たちが流暢な英語でアメリカを非難していたが、国外での生計確保のためには必要なものとはいえ、印象深かった。もちろん先生は女性のパレスチナ人であった。もしも、多くの学生たちがオーラル・コミュニケーションの必要性を真に感じているのであれば、効果が期待できる土壌が今整いつつあると言えよう。

筆者自身も、教師として英語を学ぶ者として、解決すべき課題は多い。今後も、「表層の意識改革は深層の 3 L [Love, Learning, Leadership] に支えられて真に生きたものとなる」(田中 13) という田中慎也氏の言葉とともに、それらの答えを出せるように考えて行きたいものである。そして、教室での実行にあたっては、'sein' と 'sollen' の変化を飽くことなく教えたというドイツ語の大家故関口存男氏を励みとしたい。数多くの問題点を残したままであるが、これは一つの問題提起とお考え願いたい。今後も試行錯誤を繰り返しながらの模索となる。そして現場では、一人でも英語学習への意欲を抱いてくれる学生が出現してくれば自分の役割は果たせたと思うこととする。

### 3-2. 最後に

新しい試みゆえ不安がなかったと言うのは嘘になる。結局、これまでの知識を総動員して当たらざるをえなかったが、それでも不安で、授業の日には FEN に耳をさらして、電車の中では英語を読んで発声練習をすることになった。特に朝一番の授業では声が出しにくいことは教師である筆者も変わらないからである。また、理論は知っているが、結局自分ができると理論の落差を、さまざまな現場の学生に合わせて、どこまで埋められるかということが、現場では大きな意味を持つからである。

また、本当は、英語学や英語教育が専門ではない筆者よりも、もっと知識と経験が豊富な方のほうが、このようなエッセーを書くにはふさわしいのであろう。厳しい批判と親切な助言を請うとともに、失礼があればお許しいただきたい。だが、一素人である力量の乏しい筆者が書くということに意味を見出し、あえてこの暴挙に出た次第である。これも本学の土屋澄男先生初め他の方々の励ましに助けられてのことである。この場を借りて御礼を申し上げたい。

このような過渡期の状況の中で、これがオーラル授業の効率よい展開のマニュアル化の一步となればよいと願っているしだいである。

#### 註

- 1 中・高への ALT への配置の促進は、従来の英語教育を補う必要性から出ていることは知られているが、JACET 会長小池生夫氏によると、予算面では、文部、外務両省の協力で進められているという（於上智大学）。
- 2 「…英文科出身で英語教育への関心が低いこと、英語教育の目標の不明確さがあげられる [下線筆者]」（松山 54）という英文科出身教員への批判は耳が痛い。が、筆者の知るところでは、真摯に取り組んでいるものも多い。だが、データ上ではそうであるという現実は大である。
- 3 レポートとしては、『日本人の英語』、『続日本人の英語』、『英語の感覚(上)』、『英語の感覚(下)』を推薦してレポートを書かせたが、レポート作成の基本的な技術をも説明することになってしまった。

- 4 英語使用の拡大は、イギリス、アメリカという2つの国の海外進出で浸透したことは事実だが、イデオロギーを抜きにして考えれば、英語は現在では唯一の強力な国際語であると言ってよい。その傾向は共産圏の崩壊とともに東ヨーロッパでも英語が第二言語として教えられることになるに及んで (成沢 70)、さらに加速しつつある。
- 5 石川祥一氏は「教育機器の充実と活用」の中で、テープ・レコーダー使用の問題点を指摘されている。数値はそれによった (80)。
- 6 ここでは発音記号は便宜的にできるだけ授業の時に使用した呼び名を用いた。[sh] [th] はそれに従ったが、cat、past (米語) の a の音などは発音記号で表記することとした。
- 7 例文/句は一部を除いて L. A. Hill & 安藤賢一著の2冊から取った。

#### 引用文献

- Hill, L. A. & 安藤賢一. *Twenty Tales -Readings and Exercises-* 『ストーリーから学ぶ総合英語』. 東京：成美堂, 1991.
- ..... *Amusing Tales -Readings and Exercises-* 『楽しく学ぶ総合英語』. 東京：成美堂, 1993.
- 石川祥一. 「教育機器の充実と活用」. 『英語教育』別冊 (『21世紀に向けての英語教育』). 大学英語教育学会 (JACET) 内英語教育実態調査研究報告会編著. 42, No. 4 (1993) : 78-84.
- 石田雅近. 「授業の改善と生徒・学生の意欲の喚起」. 『英語教育』別冊 (『21世紀に向けての英語教育』). 大学英語教育学会 (JACET) 内英語教育実態調査研究報告会編著. 42, No. 4 (1993) : 63-76.
- 小池生夫. 英語教育政策の方向. 第3回 JACET 英語教育セミナー. 上智大学. 28 Mar. 1994.
- 田中慎也. 「大学の英語教育改革と教員の意識改革」. 『英語教育』. 43, No. 1 (1994) : 11-13.
- 成沢義男. 「これからの英語教員の資質」. 『英語教育』. 42, No. 12 (1994) : 70.
- 松山正男. 「大学における英語教育の重要性」. 『英語教育』別冊 (『21世紀に向けての英語教育』). 大学英語教育学会 (JACET) 内英語実態調査研究報告会編著. 42, No. 4 (1993) : 50-56.

#### 参考文献

- 大津栄一郎. 『英語の感覚(上)』. 東京：岩波書店, 1993.
- ..... 『英語の感覚(下)』. 東京：岩波書店, 1993.
- Petersen, Mark. 『日本人の英語』. 東京：岩波書店, 1988.



- ..... 『続日本人の英語』。東京：岩波書店，1990。  
竹林滋・桜井雅人。『音韻・形態』。英語の演習 [1]。東京：大修館書店，1985。  
竹林滋。『英語音声学入門（カセット付）』。東京：大修館，1982。  
鳥居次好・兼子尚道。『英語の発音 一研究と指導一』。東京：大修館，1962。  
三宅川正・増山節夫。『最新英語音声学教本』。東京：英宝社，1971。

※ここにあげた音声学関係の文献は私が参考にしたものの一部であるが、概して最近のものの方がテープなどが完備しており、英語音声の概略を捉えやすいものが多い。

授業に関するアンケート

1996.01.07

(全解答総数 198名)

(伊勢村 定雄)

次の質問に答えて下さい。ただし、これは成績の一部にはなりません。答えは [A. 非常に良い/全くそう思う B. まあまあ良い/だいたいそう思う C. 普通 D. 悪い/そうは思わない] の中から選んで下さい。では始めて下さい。( [ ] 内は解答数値)

1. この授業は主として英語の音声に重点を置いたものでしたが、これについては？  
A. [93] B. [82] C. [19] D. [3] 無解答 [1]  
理由 ( )
2. 授業の進め方のパターンは？  
A. [32] B. [76] C. [78] D. [11] 無解答 [1]  
理由 ( )
3. 楽しい(「おもしろい」、「役に立つ」も含めて)授業でしたか？  
A. [34] B. [81] C. [67] D. [14] 無解答 [2]  
理由 ( )
4. 自分の今後の英語の学習のプラスになったと思うか？  
A. [44] B. [106] C. [38] D. [8] 無解答 [2]

理由 ( )

5. 本文 (presentation) の音読はプラスになったと思うか？

A. [47] B. [91] C. [57] D. [2] 無解答 [1]

理由 ( )

6. ダイアローグの暗唱は意味があると思うか？

A. [55] B. [64] C. [53] D. [25] 無解答 [1]

理由 ( )

7. あなたの授業の準備は？

A. [2] B. [38] C. [80] D. [77] 無解答 [1]

理由 ( )

8. 次は英語の音声についての質問です。

(1) スペリングと音声とは別のルールがあるという説明は理解できましたか？

A. [22] B. [48] C. [87] D. [38] 無解答 [3]

理由 ( )

(2) 次の子音の中から発音が難しいものをあげて下さい (いくつでもよい)。

th [98] s [27] sh [54] l [69] r [106] w [61] m [18]

n [14] ~ng [44] b [15] v [84] f [65] h [48] j [28]

k [12] p [8] t [23] z [36] d [8]

(3) 次の母音の中から発音が難しいものをあげて下さい (いくつでもよい)。

sit [24] key [5] get [8] ask [97] ahead [76] cut [33]

hot [30] father [17] all [5] dog [9] book [5] tool [10]

person [112] make [1] sky [3] boy [19] out [14]

note [9] / here [39] care [30] tour [63]

(4) 母音にはおおよその長さが決まっているという説明は？

A. [22] B. [45] C. [83] D. [32] 無解答 [14]

理由 ( )

- (5) a [ ] の長さが他の音より [1.5~2] 倍の長さだという説明には納得できましたか？

A. [35] B. [54] C. [73] D. [32] 無解答 [4]

理由 ( )

- (6) 母音の長さがそれぞれ、また状況に応じて変わるということは知っていましたか？

A. Yes. [89] B. No. [104]

- (7) あなたは、もうだいたいの英語の音はマスターできましたか？

A. [0] B. [14] C. [106] D. [79]

理由 ( )

9. 最後に私に対してひとこと？